東京天台

平成十六年
秋彼岸号

発行所
天台宗東京教区
〒107-0062 東京都港区南青山1-3-22
TEL.03-5785-3481
杜多道雄

童子を打つなかれ

今こそ伝教大師のご遺戒を心に

伝教大師はご遺戒のなかに「童子を打たずんば我が大恩とせん、努力よ、努力よ」と言葉を残された。

子供はみな国の将来を担っていく大切な宝である。理不尽に打つことなど決してしてはならぬ、と弟子たちに戒められた。これは今の世にこそ最も必要な戒めである。

▲宗祖　伝教大師御影

「物」の命

人のいのちにかかわる大きな事件が青少年から年少者へと広がりを見せている。

そういった事件が起こるたびに生命尊重の教育を、と叫ばれてきた。しかし、こう言われるときの生命尊重は、人間のいのちだけを対象に考えられているように思う。

いのちは人間だけにあるのではない。あらゆる動物、魚類、蟻一匹にも又、草花にもそして動かない「物」にもいのちがあるのだ。

高度経済成長以来、買っては捨て、買っては捨て、と物のいのちを粗末にしてきた。まだ十分使えるものも惜しげなく捨ててきた。今、景気が悪いといいながら、学校では、忘れ物が多くて、それを取りにこない子が多い。むしろ、新しいのを買ってもらうために捨てるという感覚であるように思える。

食に関しても、あらゆる所で食べ物が粗末に、又無駄に扱われるのを目にする。今、食物の大部分を輸入に頼っている日本なのにである。

物のいのちを粗末にする心が人のいのちまで雑に扱うことへつながってきているように思えてならない。

子は親と別の人格

また、親子の関係からすると、親は子供を自分の持ち物として考え、子供も大人と同様の、人格をもった立派な一個の存在なのだという認識が足りないように思われる。

だから今は「子供をつくる」と、若い夫婦は普通に言う。昔は、子供は神仏からの「授かりもの」と言い、神仏からお預かりした大切な子、という認識があった。子を自分のものとすれば、親は子を自分の思い通りにしたいと思うし、また、思い通りになると思うであろう。その結果、子供は

〈次頁へつづく〉

親の身勝手な欲と都合をおしつけられストレスをため込んでいくことになる。

大きな事件を起こした子供の親からは「今まで何の問題もなく育ってきました。原因がわかりません」という談話がよく聞かれる。何の問題もなく、などとどうして言えるのだろうか。子供自身は「何の問題もなく育てられてきました」と言うのだろうか。

子供にしてみれば問題だらけだったからこそ、そのストレスが溢れて一気に爆発するときが来るのである。

みんな仏性をもつ

父母恩重経というお経には、人は自らの宿業（この世に生まれたいという心）を因とし、父母を縁として生まれてくる、と説かれている。別の人格が来るのである。

また、法華経をはじめいろいろなお経には、人間をはじめあらゆる生きものや、あらゆる「もの」に同等に仏性という仏さまのいのちが宿っている、と説かれている。だから、ものを大切にする心は人間どうし慈しみ合う心へと必然つながるのである。

子供は仏さまからお預かりした子、形は小さくとも大人と同じ立派な人格を持つ存在なのだということを忘れてはならない。

こころをみがく一週間 悟りをひらくための六つの道

秋彼岸

禅定（六波羅蜜第五）

座像の仏像は、禅定（冥想）の御姿をしている。それは、お釈迦様がお悟りを開かれた時の面影になぞらえているからだ。であるならば、お釈迦様が悟られるまでの経緯を知ることができれば、禅定の意義も把握しやすくなるのではないか。

お釈迦様は、二十九歳の時、妻子のもとを去り、王子の位をも捨て、出家された。家庭や職場を捨て、居場所も告げずいなくなれば、我々だったら単なる「家出」だが、お釈迦様の場合は「出家」である。

では、「家出」と「出家」はどこがちがうのか。

家出は、家は捨てても世間の価値観は捨てていない。出家は、世間的尺度を超えて自由になろうとする。時空を超越した真理を求めるからである。

出家したお釈迦様が先ずなされたことは苦行である。安閑と過ごしたのでは世間的生活となんら変わらない。出世間の道を選んだからには、世間的価値観を放棄せねばならない。それには欲望を極度に抑えることだ。欲望を満たすことが幸せだと何気なく思いがちだが、その錯覚を打ち砕くには苦行が必要だ。しかし、六年間の苦行の結果、得たものは「大いなる道」ではなかった。そこで、お釈迦様は、苦行を棄て、尼連禅河で身体を清め、村娘のスジャータから乳粥の供養を受け、心身が調ったところで、菩提樹の下で深い禅定に入り、悟りを開かれた。

苦行にも快楽にも偏することのない「中道」の発見は、禅定を深め悟りへと到る上で非常に重要な発見であった。

中道とは、二で割って平均値を出すことではない。両極端を排して、執われることなく自由な心で最もよい道を見つけることである。

この中道の精神を知ることは、世間的生活をしている我々にとっても大いに役立つことだろう。偏った狭い心をなくして、もっと自由なものの見方を身に付け、煩悩に操られた心を制御して、心静かに保つよう心掛けることは、人生にとって無駄ではない。

例えば、波立つ水面が穏やかになれば、そこに美しい月影が宿るようなものだ。

先日、ある新聞で、人材活性プロデューサーの大谷由里子さんの「聞いてます?」というコラムを読んだ。

大谷さんの経歴は異色で、若い時に吉本興業でタレントのマネージャーをやり、結婚して専業主婦となり、やがてベンチャー企業を起して社長を勤め、現在はとことん人づくりにこだわっているのだという。

その大谷さんが、「今の日本、結構ティーチとコーチがごっちゃになっている」と指摘しておられるのだが、筆者も全く同感である。

では、ティーチとコーチの違いは何かといえば、ティーチは自分の知識を相手に教えることに主眼があり、コーチはまず相手に考えさせて、自分で答えを出させることに力点があるとでもいったらよいのだろう。

筆者は「ゆとりの教育」（その功罪は別として）の実施に当って、「歴史文化探検隊」をつくった。身近な歴史や文化を児童生徒自身が現地を訪ね、自分で調べて発表するというものである。

だが、実際に始めてみると、指導に当った教師も町の人もティーチに始終したのである。

夏休み前に全指導者を集めた筆者は、改めてコーチ方式への切替を指示した。

それは、まず児童、生徒の自主性を認め、隠れている才能を引出して、それをサポートするという体制とでもいったらいいだろう。

これは正に大谷さんのいう「感じて、興味をもって、動く人づくり」そのものだと思う。

更に、大谷さんは、吉本興業時代の上司に「一番大切なのは聞くこと」だといわれたという。コーチもティーチも、その背景にこの聞くという姿勢だけは失ってはならないと思うのである。

東京教区　第二回

授戒会

台東区谷中天王寺にて

来たる11月20日に開催

平成18年は伝教大師が比叡山に天台宗を開かれて1200年になる記念の年である。

この慶期を機に、天台宗では一人でも多くの檀信徒のみなさまに天台宗徒としての戒律を受けていただこうと授戒会をすすめている。

仏に向かって

東京教区では昨秋、深大寺を会場に第一回目の授戒会を催し、授戒者は二百四十名の多くに達した。しかし、残念ながら会場や人数の関係で参加者は教区西部地区の方々に限られてしまった。今回は都心であるので、中央部の方々には是非お受けいただきたい。

前回授戒されたある方は、「会場の荘厳さに身のひきしまる思いで、おかみそりを受けたときはたいへん感動した。何か清々しく心が変わったように感じた。その後の生活にふと責任を感じたり、充実感を覚えたりしている」と言われていたが、正式に仏弟子になったという自覚は確かにその後の生活をよい方に変えるようである。

授戒は、すべての人が持っている仏性（ぶっしょう）（仏さまになれる性質）を磨き出すのに必要な力となる。戒は、悪しきことを慎み、善きことを進んで行おうと戒めるもので、それを毎日の生活の中で務めることによって自らの仏性を輝き出させ、また周囲の人をも感化させるのである。

授戒会の会場で、たくさんの仏さまの御前で法名をいただき、戒めを保つお誓いをすることが、更にその力を大きくするのである。

まだ戒を受けられていない方は是非この機会にお受けになることをおすすめする。

申込み等、詳しくは菩提寺にお問い合わせ下さい。

天台の寺めぐり ⑱

深大寺

武蔵野の古刹

武蔵野の緑濃い深大寺周辺は、春は新緑の香、夏は緑陰に涼み、秋は紅葉の散策、冬は雑木林に武蔵野をしのび、ときには雪景色、と四季それぞれに趣があっていつ訪れても飽きることがない。

お寺の仏教行事の他に、近年は境内での消防庁音楽隊の野外コンサートや（五月）薪能なども催され参詣客のみならず、いろいろな人が訪れて賑わう。

▲ 大祭のお練り供養

元三大師（がんざんだいし）大祭

なかでも最大の行事は毎年三月三、四日両日に行われる厄除元三大師大祭である。

第十八代天台座主良源大僧正は、正月三日に入寂されたので元三大師とよばれ、当山大師堂には縁あって大師ご自刻のご尊像が奉安されている。

大師は非常に霊験のあった方で、いにしえより三日のご縁日と、大師は如意輪観音の化身といわれたので十八日の観音縁日には近郊より群参が絶えなかったという。現在は縁起だるま市も同時開催され厄除祈願の参詣と共にその賑わいは華やかに続いており、きらびやかな装束の衆僧によるお練り供養など、格好の被写体になって多くのカメラ愛好家を喜ばせている。

▲ 門前に憩う

都民憩いの場

境内には、昨秋改装された本堂のほか、元三大師堂、深沙大王堂、また重文で東国最古の白鳳釈迦像を安置する釈迦堂、鐘楼や多くの句碑がある。

門前には多くの蕎麦店や土産物店が軒をつらね、ほとんどの店で自慢の手打ちの深大寺そばを供してくれ、また地ビールやそば饅頭など、両党もれなく喜ばせてくれる。

また境内に続く北側には広大な神代植物園があって、自然の雑木林や四季折々の花が鑑賞でき、特に、五、六月にはおよそ二七〇種五千本のバラが咲き誇りそれは見事である。

参詣に散策に、食味に自然鑑賞にと、深大寺とその周辺は都民の憩いの場になっている。

（交通）京王線調布または、つつじヶ丘からと、JR三鷹からバス深大寺行き。

▲ 縁起だるま市

▲ 重文 白鳳釈迦像